



詩

奨励賞

それがねえ

西軽海町 佐久間雅子

私は折り返し点に立った
仕事と若さが通り過ぎた
鳥のさえずり
そよぐ風に
花々に共感を覚える

「それがねえ」
気付いたら

動きや覚えがにぶくなり
目や歯も弱ってしまつた
ああ

私はこれまでのことを思う

周りの声に左右され

ただ

穏やかにと

ほとんど従う日々を重ねてきた

このまま老いてもいいが

なにか空しさが心をよぎる

むし暑い夜、外に出る

遠くで

女同士のおしゃべりが聞こえる

やれば出来ることばかりなのに

「それがねえ

人に左右されて

なかなか出来ないねえ」と

私は決めた

老いたからこそ

私だけの虹をつかもう

夢を描いたままであったことをしよう

花の水やりを終え

家に入ろうとしたら

バツタがピヨーンと飛び出した

薫風

西軽海町 佐久間雅子

カーテンの揺れはブランコ

それともゆりかごかな

100才の詩人が言う

「お陽さまと遊んでいるの」と

そんな昼下り

ゆつたりとコーヒーを飲む

この静かな揺れは

いつでもやさしかった祖母と母

リズムカルなこの揺れは

ちよつとハデだった友

ゆつくりと立ち止まるような

この揺れは

もつと話したかった厳しい父

思わず

なつかしさがこみあげ

目頭が熱くなる

ふと立ち上って

カーテンを抱きしめると